

【共同研究】

## スウェーデンと比較した日本の老年期イメージと 家族観の考察

秋山 美栄子\* 大塚 明子\*\* 森 恭子\*\*\* 星野 晴彦\*\*\*\*

A comparative study on views of old age and views of the family in Japan and Sweden

Mieko AKIYAMA, Meiko OTSUKA, Kyoko MORI, Haruhiko HOSHINO

Japan has the world's fastest rate of aging. In Japan, various issues concerning older adults are being discussed, including changing the age at which one is considered elderly. Sweden is similar country with a long life expectancy. The current study compared views of old age and views of the family in current Japanese society and Sweden.

In Japan, older adults are viewed dimly overall and individually, which was in sharp contrast with Sweden. Views differed, however, between age groups: younger people had the dimmest view of the elderly while elderly people had the brightest view. In addition, Japanese welfare workers have a realistic view, suggesting that they come into contact with older adults more often and understand that the elderly vary widely.

This study examined opinions on the following family issues: (1) a child's economic independence, (2) a child's intent to support his or her parents in their old age, (3) one's own views on life after retirement, and (4) a parents' responsibility toward his or her child. Japanese respondents with close family relationships had high scores for QOL, self-esteem, and general trust in others. Many younger Japanese respondents had weak family relationships and little trust in others.

Opinions among Japanese respondents were: (1) a child should be economically independent as soon as possible, (2) a child should support his or her parents to the extent possible, (3) respondents did not expect their children to take care of them after retirement, and (4) opinions were divided as to the extent of a parent's responsibility to his or her child.

**Key words** : views of old age, views of the family, family relationships, Sweden, QOL, self-esteem, interpersonal trust

老年期イメージ、家族観、家族関係、スウェーデン、QOL、自尊感情、対人信頼感

---

\* あきやま みえこ 文教大学人間科学部心理学科  
\*\* おおつか めいこ 文教大学人間科学部人間科学科  
\*\*\* もり きょうこ 文教大学人間科学部人間科学科  
\*\*\*\* ほしの はるひこ 文教大学人間科学部人間科学科

## 序

2017年敬老の日を目安に厚労省が発表した100歳以上高齢者数は、67,824人とこの20年間で6.7倍の増加に至ったことが分かった(2017年9月15日付)。国立社会保障・人口問題研究所の将来人口推計によると、日本の総人口は減少するが100歳以上の高齢者は今後も増加の一途で、2025年には13万人を超える見込みである。高齢化率、平均寿命、健康寿命共に毎年更新している。このように世界的な長寿国となった日本において、社会通念とされてきた高齢者に対する概念が変わりつつある。2017年1月、日本老年学会と日本老年医学会は、「高齢者」と定義される年齢を75歳以上に引き上げる提案を発表した。現行では世界保健機関(WHO)や多くの先進諸国に倣い「65歳以上を高齢者」としており、「65歳~74歳を『前期高齢者』“young old”」、 「75歳以上を『後期高齢者』“old old”」としている。しかしながら、高齢者の心身の健康に関する様々なデータや国民の意識調査結果から、加齢に伴う身体機能の変化の出現年齢が70歳代からであると判断した結果である。近々の発表された健康寿命をみても、男女ともに70歳を超えていることが分かる。このような現状から、同学会では「65歳~74歳」を『准高齢者』とし、「75歳~89歳」を『高齢者』、90歳以上を『超高齢者』と変更する提案をした。年齢の変更は様々な政策や現行の社会サービスなどに複雑に影響を及ぼすことが懸念される。

さて、日本の高齢化率は26.7% (2015年10月現在)である。比較調査国のスウェーデンの高齢化率は約20%で、両国とも長寿国となっている。GLOBAL NOTE (2017年7月)によると、世界の高齢化率ランキングでは、日本が1位 (26.86% - 2016年統計)で、スウェーデンは8位 (20.20% - 2016年統計)にランクされている。高齢化が進む両国であるが、高齢者対策はかなり異なっている。高福祉のスウェーデンでは1992年「エーデル改革」により、高齢者の医療費や住居などが効率化、在宅主義が進んできた。近年は行き過ぎた在宅主義の見直しや公的福祉に頼らない民間サービス

の利用や家族介護なども取り入れられるように変化しつつある(石橋2016)。日本においては2000年に施行された介護保険制度が財源の抑制から改正を重ね、利用者負担割合が増えつつある。

高齢者を取り巻く社会背景の異なる両国において、老年期観や家族観を比較検討することは興味深いことである。本研究は「価値観・労働観・ライフスタイル等に関する日本と北欧の比較調査研究」(以下、共同比較調査研究)の一環として実施された。

## 1. 方法

### (1) 調査対象者

本研究は、2010年の量的調査および2011年、2015年に実施した質的調査である日本とスウェーデンの共同比較調査研究のデータを老年期観(老年期イメージ)と家族観に焦点化して再分析したものである。調査の詳細については、『人間科学研究第33号—「価値観・労働観・ライフスタイル等に関する日本と北欧の比較調査研究 第1次報告」p.105-119, 2011.』、『人間科学研究第38号—「ワーク・ライフ・バランスから見た日本とスウェーデンの比較調査研究」p.93-107, 2017.』を参照頂きたい。調査対象は、日本とスウェーデンの大学生、教員、福祉施設職員の各3グループに質問紙調査を実施した。その後、調査結果をもとに両国のそれぞれ3グループの複数名に対してインタビュー調査を実施した(大塚他2015)。

本研究では、回答に不備のない660名(日本376名、スウェーデン284名)を分析対象者とし、両国の男女比はほぼ3:7、身分の割合も同率で調査ができた。両国の平均年齢は近似であるが、学生の年代構成はスウェーデン学生グループが10歳近く高い(詳細は前掲参照)。

### (2) 調査手続き

調査は個別無記名式の質問紙にて実施された。2010年にスウェーデンおよび日本において質問紙を配布し、その場で記入・回収する方法及び留置法により実施した(詳細は前掲参照)。

倫理的配慮として、表紙に研究の趣旨を説明し、研究協力は任意であること、プライバシーの保護、

データは統計的に処理され個人の特定や公表はしないことを明記し、さらに配布時に口頭でも説明した。その上で、調査票の提出をもってこれらに同意したこととした。また、調査結果のまとめは何らかの形でフィードバックする旨も表記した。

(3) 調査項目

対象者の属性として性別、年齢、生まれた場所、最終学歴、既婚の有無と状態、子どもの有無、また、ワーク・ライフ・バランス、老年期観、家族観、移民や多文化観など、援助規範意識（箱井・高木1987）、QOL（Quality of Life, WHO）、相互独立的一相互協調的的自己観の短縮版（高田2000）、自尊感情（Rosenberg 1965）、対人信頼感（堀井・植谷1995）の心理尺度を用いた（詳細は大塚・秋山・森・星野2011）。

本研究の分析対象である老年期観については、老年期に対する一般的イメージと自分自身に関する個人的イメージの2段階で質問した。老年期のイメージを「暗い」から「明るい」まで5段階で回答を求めた。また、家族観については、家族関係の現状と親子関係に関する意見を問う以下の5問を設定した。まず、現在の家族関係について、1. 「家族と深く心が通じ合っていると思うか」という質問に対して、「（そう思う）」「まあそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の4件法および「わからない」という選択肢を設けた。続いて、主に親子関係に関する意見について、2. 「子どもは親から経済的に早く独立するべきだ」、3. 「自分の子どもに老後の面倒をみてもらいたい」の2問は、「（そう思う）」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4件法および「わからない」という選択肢を設け、4. 「老親の扶養」に関する質問は、「（どんなことをしてでも親を養う）」「自分の生活力に応じて親を養う」「親自身の力や社会保障にまかせる」「わからない」の4選択肢を、5. 「親の子どもに対する責任」についての考えは、「（親は子どもに最良のことをしてやるべきであって、それによって自分たちの幸せが子どもの犠牲になってもやむをえない）」「親には親の人生がある、親は子どものために自分たちの幸せを犠牲にすべきではない」「どちらでもない」の3選択肢を設

けた。なお、設問については、世界価値観調査および世界青年意識調査を参考にした。

スウェーデンでの調査には質問紙を英訳してスウェーデン語に翻訳したものを使用した（詳細は大塚他2011）。統計的分析にはSPSS 23. を使用した。

2. 結果と考察

1) 老年期観

(1) 日本とスウェーデンの老年期イメージの比較（全体像）

まず、老年期の一般的イメージについて日本とスウェーデンの全体像を比較した結果、極めて顕著な差がみられスウェーデンの方が明確に明るいイメージ寄りとなっている（図1）。続いて老年期の自分自身のイメージすなわち個人イメージについての結果を図2に示した。個人イメージの結果

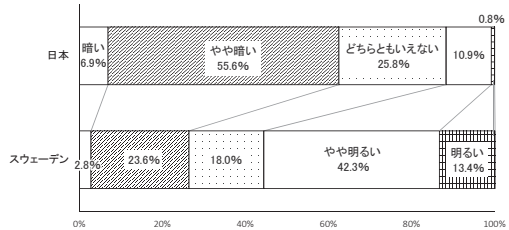


図1 日本とスウェーデンの老年期一般イメージ

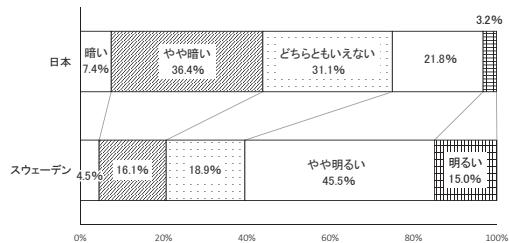


図2 日本とスウェーデンの老年期個人イメージ

も同様に日本に比較してスウェーデンでは明るいイメージが強い。また、一般イメージと個人イメージを比較すると、両国共に個人イメージの方が暗いイメージが減少して、明るいイメージが増加している結果になった。社会一般の高齢者に対するイメージと比較して、自分自身の老年期イ

メージは若干明るいと考えられる傾向があると解釈できる。それは、現実的な自己の環境要因や状況として想定できる場合もあるだろうが、希望としての自身の行く末が明るくあってほしいと願う気持ちも含まれていると解釈できよう。河野・太田 (2003) は、現在の高齢者に対するイメージより自分が高齢者になった時のイメージがポジティブな評価であることを指摘している。いずれにしろ、個人イメージは主観的であり、客観性には乏しいと思われる。そこで、老年期イメージを1つの指標として分析する際には、未来志向の自身の将来的な個人イメージよりも現在の社会情勢を反映していると考えられる一般イメージの方が分析には適していると判断されるので、本研究には一般イメージを分析対象とする。

5段階での解答においては日本の「明るい」とスウェーデンの「暗い」が極端に少なく、分析条件に困難があるため、「明るい」と「やや明るい」を合算して「明るい」に、同様に「暗い」と「やや暗い」を合算して「暗い」に、「どちらでもない」は「ふつう」という名称にして3段階にまとめた結果を分析した。以降、これらの記述には「老年期イメージまとめ3群」と表記する。老年期の一般イメージでは、記述統計において日本は「暗い」と回答した者が235名 (62.5%) で一番多い。次いで「ふつう」97名 (25.8%)、「明るい」44名 (11.7%) の順であった。スウェーデンは「明るい」と回答した者が158名 (55.7%) で一番多い。次いで「暗い」75名 (26.3%)、「ふつう」51名 (18.0%) の順であった (図3)。

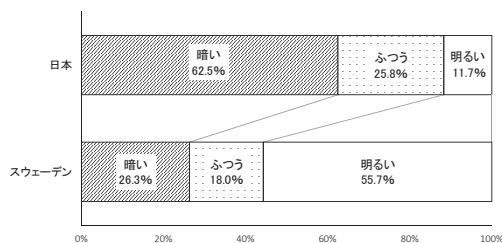


図3 日本とスウェーデンの老年期一般イメージまとめ群

カイ二乗検定の結果 ( $\chi^2 = 151.331$ ,  $df=2$ ,  $P<.01$ )、有意差が認められた。残渣分析の結果、

「暗い」は日本が有意に多く、スウェーデンが少なかった。「ふつう」は日本が有意に多く、スウェーデンが少なかった。「明るい」は日本が有意に少なく、スウェーデンが多かった。同じく老年期個人イメージまとめ3群の結果を示す (図4)。

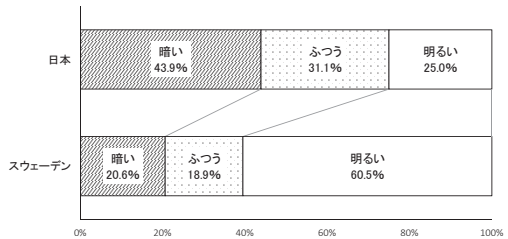


図4 日本とスウェーデンの老年期個人イメージまとめ群

全体像からは、スウェーデン社会における高齢者像は明るく、日本社会における高齢者像は暗いという真逆の結果であることが明らかになった。そこで、データの背景から主に有意差の認められた項目を取り上げ、高齢者のイメージに影響を与えている要因を検討、考察する。

## (2) 日本とスウェーデンの老年期一般イメージと年代の検討

年齢は10代から60代まで10歳刻みで分析した。日本の老年期一般イメージまとめ3群と年代では、10代から50代までは同じく「暗い」イメージをもつ者が一番多く、次いで「ふつう」、「明るい」の順であるが、唯一60代は「ふつう」イメージをもつ者が一番多く、「暗い」、「明るい」の順であった。カイ二乗検定の結果、有意差は認められなかった。スウェーデンの老年期一般イメージまとめ3群と年代では、全ての年代で「明るい」イメージをもつ者が一番多かった。カイ二乗検定の結果 ( $\chi^2 = 19.472$ ,  $df=10$ ,  $P<.05$ )、有意差が認められた。残渣分析の結果、「暗い」イメージは30代が有意に多く、50代が少ない。また、「明るい」イメージは50代が有意に多かった。

老年期一般イメージを従属変数とした国と年代3群 (10・20代=若年、30・40代=中年、50・60代=高年) の分散分析の結果、国と年代3群それぞれに主効果が認められ、交互作用は認められなかった。点数配分は、「暗い=1点」「やや暗い=2

点」「どちらでもない(ふつう) = 3点」「やや明るい = 4点」「明るい = 5点」とした(得点範囲: 1~5点)。国は、 $F(5, 1) = 171.592, P < .001$ 主効果が認められ、年代3群では、 $F(5, 2) = 5.201, P < .01$ 主効果が認められた。年代3群全てにおいて日本とスウェーデン間に有意な差異が認められた。日本よりスウェーデンの方が老年期一般イメージの得点が高く、明るいイメージをもっていることがわかる。年代3群は両国とも若年 < 中年 < 高年の順に年齢に伴って老年期一般イメージが明るくなっていく。また、若年と中年間および若年と高年間に有意差が認められ、若年は暗いイメージをもっていることがわかる。若者は年齢が離れている高齢者に対して遠い存在に感じており、具体的なイメージがもてないのではないかとと思われる。その結果、身体面、精神面、社会面のいずれにおいても加齢による衰退のイメージが強いかもしれない。中年、高年と年齢を重ねることで高齢者との距離が縮まり、近い存在として意識されるのではないかと考えられる。その結果、自身との比較において身体面、精神面、社会面がより具体的にイメージされることで、自身の延長線上にある高齢者像が見えやすく、単純に暗いイメージになることは避けられると思われる。年齢差は心理的距離にも影響しているのではないかと考える。

### (3) 日本とスウェーデンの老年期一般イメージと身分(学生・教員・福祉職)の検討

日本の身分(学生・教員・福祉職)と老年期一般イメージまとめ3群では、学生・教員・福祉職共に「暗い」が一番多く、次いで「ふつう」、「明るい」の順であった。カイ二乗検定の結果( $\chi^2 = 14.934, df=4, P < .01$ )、有意差が認められた。残渣分析の結果、「暗い」は学生が有意に多く、「ふつう」は学生が少なく、福祉職が多かった。スウェーデンの老年期一般イメージまとめ3群と身分では、学生・教員・福祉職共に「明るい」と回答した者が一番多かったが、カイ二乗検定の結果、有意差は認められなかった。日本の身分においては、年齢の若い学生の影響が大きい。また、福祉職は学生や教員グループに比較して、高齢者との接触機会がより多く、高齢者を身近に感じて

いることが推測されるので、現実的な高齢者イメージをもっているのではないかと考えられる。つまり、要介護高齢者から元気高齢者まで個人差が大きいことを理解できていると思われる。その結果、老年期イメージは明るくもなく、暗くもなくという中間のイメージを選択する傾向があるのではないかと考える。以上、老年期のイメージについて日本とスウェーデンの比較調査から主に有意差が認められた項目について、結果と考察をまとめた。次に家族観の視点から結果を述べる。

## 2) 家族観

### (1) 日本とスウェーデンの家族関係の検討

家族観に関する質問は5問である。まず、家族関係について、「あなたの家族と深く心が通じ合っていると思いますか(Do you think you relate to your family members?)」を質問した。回答は4つの選択肢を設け、「わからない = 0点、そう思わない = 1点、あまりそう思わない = 2点、まあそう思う = 3点、そう思う = 4点」として点数化した。(得点範囲: 0~4点)。分析しやすいように「わからない」「関係希薄(そう思わない+あまりそう思わない)」「関係深い(まあそう思う+そう思う)」の3群にまとめて分類した。日本もスウェーデンも関係深いと回答した者が一番多かった。カイ二乗検定の結果( $\chi^2 = 17.412, df=2, P < .01$ )、有意差が認められた。残渣分析の結果、日本は家族関係希薄が有意に多く、関係深いが少ない。また、スウェーデンは逆に関係希薄が有意に少なく、関係深いが多かった(図5)。

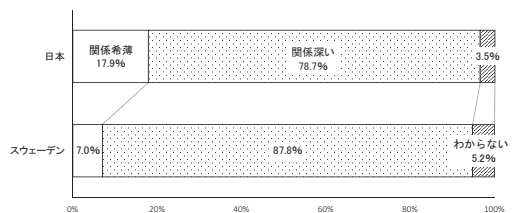


図5 日本とスウェーデンの家族関係(心のつながり)

### ① 家族関係と年代および性差の検討

日本の年代3群と家族関係3群では、全年代で「関係深い」と回答した者が一番多かった。カイ二乗検定の結果( $\chi^2 = 14.191, df=4, P < .01$ )、有意差



が認められた。残渣分析の結果、若年グループは「関係希薄」が有意に多く、「関係深い」が少ない。高年グループは「関係希薄」が有意に少なく、「関係深い」が多かった。スウェーデンの年代3群と家族関係3群では、どの年代でも「関係深い」と回答した者が一番多く、カイ二乗検定の結果に有意差は認められなかった。

日本の性別と家族関係3群では、男女共に「関係深い」と回答した者が一番多かった。カイ二乗検定の結果、男女の有意差は認められなかった。しかし、スウェーデンの性別と家族関係3群では、男女共に「関係深い」と回答した者が一番多かったが、カイ二乗検定の結果 ( $\chi^2=5.954$ ,  $df=2$ ,  $0.05 < P < .10$ )、有意差が認められた。残渣分析の結果、男性は「関係希薄」が有意に多く、「関係深い」が少ない。また、女性は逆の結果で「関係希薄」が有意に少なく、「関係深い」が多かった。

#### ② 家族関係と身分の検討

日本の身分と家族関係3群では「関係深い」と回答した者が一番多かった。カイ二乗検定の結果 ( $\chi^2=12.133$ ,  $df=4$ ,  $P < .05$ )、有意差が認められた。残渣分析の結果、学生は「関係希薄」が有意に多く、「関係深い」が少ない。教員は「関係希薄」が有意に少なく、「関係深い」が多かった。スウェーデンの身分と家族関係3群では、全てのグループで「関係深い」と回答した者が一番多く、カイ二乗検定の結果に有意差は認められなかった。

#### ③ 家族関係と老年期イメージの検討

日本の家族関係3群と老年期イメージまとめ3群では、どのグループも「関係深い」が多く、カイ二乗検定の結果において一般イメージ、個人イメージ共に有意差は認められなかった。

スウェーデンの家族関係3群と老年期一般イメージ3群では、特徴的な結果になった。家族関係において「関係希薄」グループの老年期イメージは「暗い」が多く、「わからない」グループのイメージは「ふつう」が多く、「関係深い」グループのイメージは「明るい」が多かった。カイ二乗検定の結果 ( $\chi^2=18.205$ ,  $df=4$ ,  $P < .01$ )、有意差が認められた。残渣分析の結果、「わからない」グループは老年期イメージ「ふつう」が有意に多

い。また、「関係深い」グループは老年期イメージ「ふつう」が有意に少なく、「明るい」が多かった。さらに、老年期個人イメージと家族関係3群では、老年期一般イメージと類似した傾向であるが、個人イメージの方が全体的に若干ではあるが老年期イメージが明るい方へシフトしている。カイ二乗検定の結果 ( $\chi^2=22.154$ ,  $df=4$ ,  $P < .01$ )、有意差が認められた。残渣分析の結果、家族関係「わからない」グループは老年期個人イメージ「ふつう」が有意に多く、「明るい」が少ない。また、「関係深い」グループは老年期個人イメージ「ふつう」が有意に少なく、「明るい」が多かった。

スウェーデンの老年期イメージは、家族関係と関連が深いことがわかる。密な関係にある者ほど老年期イメージが明るいことが示唆された。家族間で頻繁に連絡を取り合い、訪問などで会う機会が多く、家族と共有している時間や心のふれあい、家族への思いも強いと考えられる。この結果だけで一般化することはできないが、家族関係の密な者は現状の自身の家族をモデルとして家族に支えられた老後を肯定的に受け止められるのではないかと推測される。

#### ④ 家族関係とQOLの検討

日本の家族関係3群とQOL全体の分散分析では、グループ間に有意差が認められた。F (2) = 9.129,  $P < .001$ 。家族関係において、「関係深い (QOL=3.18)」はQOL平均値が一番高く、次いで「関係希薄 (QOL=2.78)」、「わからない (QOL=2.69)」と続く。「関係深い」と「関係希薄」間に有意差が認められ、「関係深い」と「わからない」間にも有意差が認められた。「関係希薄」と「わ

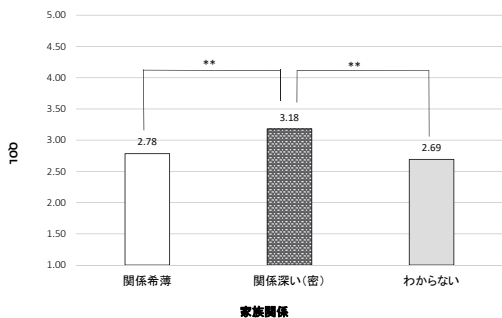


図6 日本の家族関係とQOL

からない」間には有意差が認められなかった(図6)。

スウェーデンの家族関係3群とQOL全体との分散分析では、有意なグループ間差は認められなかった。QOL得点の平均値が高い順は、「関係深い」、「関係希薄」、「わからない」であった。

⑤ 家族関係と自尊感情の検討

日本の家族関係3群と自尊感情の分散分析では、グループ間差が認められた。F(2) = 13.869, P < .001。各グループ間に有意差が認められ、自尊感情得点平均値の高い順は、「関係深い(32.63)」 > 「関係希薄(28.78)」 > 「わからない(24.23)」である。3つのグループ間にそれぞれ有意差が認められた(図7)。

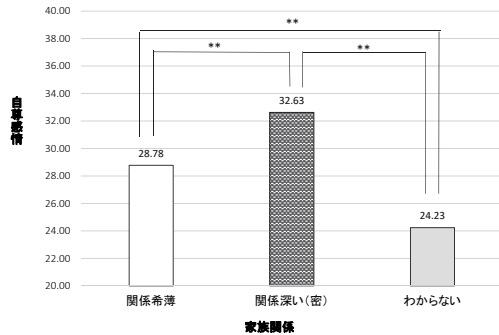


図7 日本の家族関係と自尊感情

スウェーデンの家族関係3群と自尊感情の分散分析では、有意なグループ間差は認められなかった。「関係深い」グループの自尊感情得点平均値が最も高く、次いで「関係希薄」、「わからない」であった。

⑥ 家族関係と対人信頼感の検討

日本の家族関係3群と対人信頼感の分散分析では、グループ間に有意差が認められた。F(2) = 5.375, P < .005。「関係深い(51.67)」グループは対人信頼感得点平均値が最も高く、次いで「わからない(47.92)」グループで、「関係希薄(47.89)」グループが最も低い。「関係深い」と「関係希薄」間に有意なグループ間差が認められた(図8)。

スウェーデンの家族関係3群と対人信頼感の分散分析ではグループ間差が認められた。F(2) = 4.008, P < .019。「関係深い(54.80)」グループは

対人信頼感得点平均値が最も高く、次いで「わからない(52.47)」、「関係希薄(47.53)」グループは最も低い。「関係深い」と「関係希薄」間に有意差が認められた(図9)。

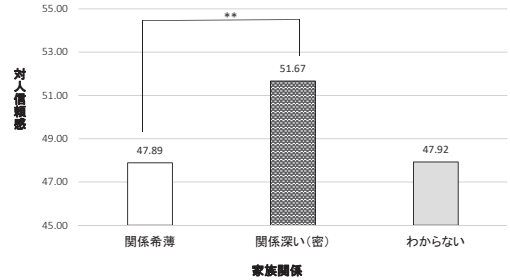


図8 日本の家族関係と対人信頼感

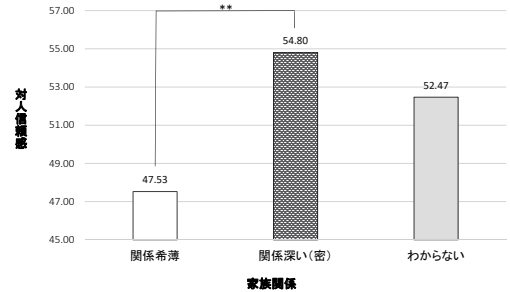


図9 スウェーデンの家族関係と対人信頼感

家族関係をまとめると、年齢による影響は日本で見られ、若年で関係希薄が多く、高年では関係深いが多いことが分かった。性差はスウェーデンで見られ、男性より女性が関係深いことが分かった。また、身分による影響は日本で見られ、学生は関係希薄で教員は関係深い、学生は年齢の影響が大きいことに注意が必要である。心理尺度との関連では、家族の関係深いグループがQOL、自尊感情、対人信頼感も高いという結果になった。日本もスウェーデンも同じ傾向であったが、日本は3つの尺度全てに有意なグループ間差が認められ、スウェーデンは対人信頼感のみ有意差が認められた。特筆すべきはQOL、自尊感情については、両国共に「関係深い」グループの得点が高く、次いで「関係希薄」、得点の低いのは「わからない」と回答したグループであった。しかし、対人信頼感「関係深い」グループの得点が高い

のは共通しているが、「関係希薄」グループが「わからない」グループよりも得点が低いという結果になったということである。この傾向は日本もスウェーデンも一致していた。これらの結果から家族関係についての評価が良くない者は対人信頼感が低いということが示唆される。

(2) 日本とスウェーデンの親子関係の検討

① 子供の経済的自立の検討

家族観を考える視点として、主に親子関係に着目して作成された子どもの経済的自立に関する質問は、「子どもは親から経済的に早く独立すべきだ」という考え方についてどう思いますか(What do you think of the idea of “Children should economically be independent from their parents as soon as possible?”)である。回答は、「そう思わない、あまりそう思わない、まあそう思う、そう思う、わからない」の5択である。この質問は、世界青年意識調査の「親子関係に関する意識」のQ1-bをそのまま使用した。分析では、「そう思わない」「早く独立すべき」「わからない」の3群に分類してまとめた。日本もスウェーデンも「早く独立すべき」と回答した者が多かったが、カイ二乗検定の結果 ( $\chi^2=33.809$ ,  $df=2$ ,  $P<.01$ )、有意差が認められた。残渣分析の結果、日本は「そう思わない」が有意に少なく、「早く独立すべき」が多い。しかし、スウェーデンは逆に「そう思わない」が有意に多く、「早く独立すべき」が少なかった(図10)。

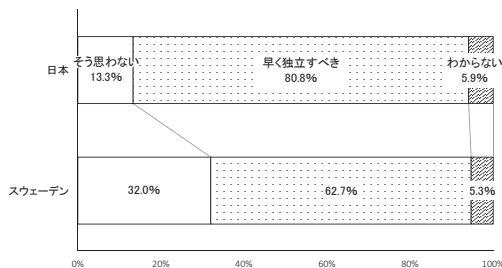


図10 日本とスウェーデンの子の経済的自立

日本における子の経済的自立3群と年代3群では、若年、中年、高年の順に「そう思わない」と回答した者が多く、逆に高年、中年、若年の順に

「そう思う」と回答した者が多い。カイ二乗検定の結果に有意差は認められなかった。親年代のグループ程、子の経済的自立を早くと考え、20-30代の若者自身は早期の経済的自立に否定的な考えを持つ傾向があることがうかがえる。スウェーデンでは年代の影響はないことが分かった。

本調査と世界青年意識調査の結果を比較してみる。世界青年意識調査の概要を簡潔に説明すると、1972(昭和47)年から約5年毎に青少年を対象に日本を含む主要国で8回実施されている内閣府主催の意識調査である。第8回調査は2007(平成19)年に5か国で実施されたが、残念ながらスウェーデンは対象国になっていない。そこで、2003年にスウェーデンを含む5か国で実施された第7回目の調査結果を比較した。対象者の年齢は18歳~24歳で、1000人規模の調査であった。内閣府がまとめた5か国比較データから日本とスウェーデンについて、本調査と同様3群にまとめて作成した図11を示す。日本青年の8割以上(82.8%)が早く独

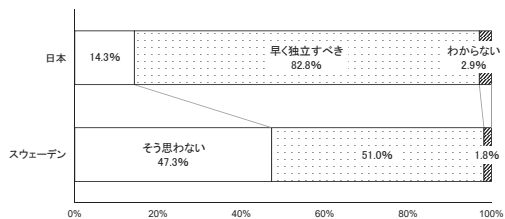


図11 日本とスウェーデンにおける青年の子の経済的自立意識

出典：第7回青年意識調査(2003年内閣府より作成)

立すべきと回答したのに対し、スウェーデン青年は早く独立すべき(51%)とそう思わない(47.3%)割合に大差はない。年齢を考慮しても本調査と同傾向である。すなわち、日本では子どもは親から経済的に早く独立すべきだという考えが主流であることがわかる。

② 老親扶養意識の検討

続いて親子関係の視点から、「年老いた親の扶養」に関する質問であるが、これも世界青年意識調査の継続設問である。「年老いた親を養うことについてどのように思いますか(What do you think of supporting your old parents?)」である。



回答は、「どんなことをしてでも親を養う (You will support your parents at all costs.)、自分の生活力に応じて親を養う (It is up to your ability to earn your lives.)、親自身の力や社会保障にまかせる (Leave it to your parents' ability or social welfare system.)、わからない (You don't know.)」の4選択肢である。

日本とスウェーデンでは大きな違いがあり、カイ二乗検定の結果 ( $\chi^2=242.619$ ,  $df=2$ ,  $P<.01$ )、有意差が認められた。残渣分析の結果、全てにおいて有意差があり、日本は「自分の生活力に応じて親を養う」が多く、それ以外の3項目が少なかった。また、スウェーデンは、全く逆の結果で「自分の生活力に応じて親を養う」のみが少なく、他の3項目「どんなことをしてでも養う」、「わからない」、「親自身や社会保障に任せる」が多いという結果であった。日本の年代3群全ての年代で「自分の生活力に応じて養う」と回答した者が多く、カイ二乗検定の結果に有意差は認められなかった(図12)。

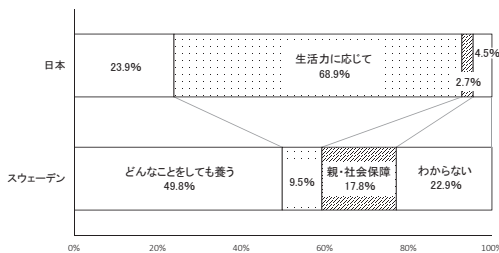


図12 日本とスウェーデンの老親扶養意識

第7回世界青年意識調査 (2003年内閣府) によると、日本青年は「自分の生活力に応じて親を養う」が64.8%で一番多く、「どんなことをしてでも親を養う」が25.2%、「親自身の力や社会保障にまかせる」が4.4%、「わからない」が5.6%であった。スウェーデン青年は「自分の生活力に応じて親を養う」が70.5%と日本より多く、「親自身の力や生活保障にまかせる」が14.7%、「どんなことをしてでも親を養う」が13%、「わからない」が1.9%であった。また、2013 (平成25) 年度に実施された内閣府による同規模のスウェーデンを含む対象国7か国、対象者の年齢は13歳～29

歳、「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」によると、日本青年は「自分の生活力に応じて親を養う」が56.3%、「どんなことをしてでも親を養う」が19.7%、「親自身の力や社会保障にまかせる」が8.5%、「わからない」が15.5%であった。スウェーデン青年は「自分の生活力に応じて親を養う」が57%、「どんなことをしてでも親を養う」が25%、「親の力や社会保障にまかせる」が12.2%、「わからない」が5.9%であった (図13)。

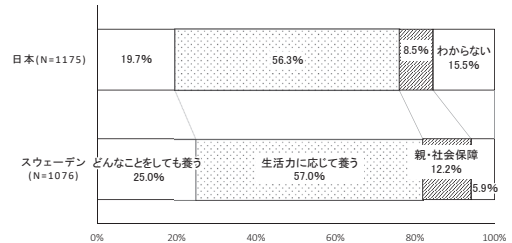


図13 日本とスウェーデンにおける青年の老親扶養意識  
出典：平成25年度我が国と諸外国の若者の意識に関する調査  
(平成26年6月内閣府より作成)

これら2つの国際比較調査によると、日本もスウェーデン青年もほぼ同じ傾向を示している。

本調査と比較するとスウェーデンの結果に乖離がみられるが、調査対象者の年齢構成に大きな原因があると考えられる。内閣府の調査は青少年が対象であり、本調査は幅広い年齢層が対象である。本調査対象学生についても日本学生の平均年齢は19.6歳で、スウェーデン学生は28.3歳であり、スウェーデンの調査対象年齢が完全にずれていて単純に比較できないと判断される。調査対象の偏りやサンプルサイズにも大きな相違がある。また、受けた教育や育った時代背景などの世代間差も大きいと思われる。対象者の世代背景や現状および今後の社会情勢が大きく影響した結果と考えられ、さらに高齢化の及ぼす今後の両国の施策や社会変化による新たな影響を避けられないと推測される。日本の結果は同じ傾向を示しており、自分の生活力に応じて親を養うという考えが多いことがわかる。

### ③ 子供に老後を期待の検討

同じく親子関係の視点から作成された子供に老後の面倒を期待するかについての質問は、「自分

の子どもに老後の面倒をみてもらいたいと思いますか (Do you want to be looked after by your children in your old age?)」である。回答は、「そう思わない、あまりそう思わない、まあそう思う、そう思う、わからない」の5択である。同様に分析では、「期待しない」「期待する」「わからない」の3群に分類してまとめた。日本は「期待しない」が58.5%、「期待する」が27.1%、「わからない」が14.4%であった。スウェーデンは「期待しない」が60.1%、「期待する」が27.1%、「わからない」が12.8%であった。日本もスウェーデンもほぼ同じ割合で、「期待しない」が多く、カイ二乗検定の結果に有意差は認められなかった。また、日本の年代3群全てにおいて、「期待しない」と回答した者が多く、カイ二乗検定の結果に有意差は認められなかった (図14)。

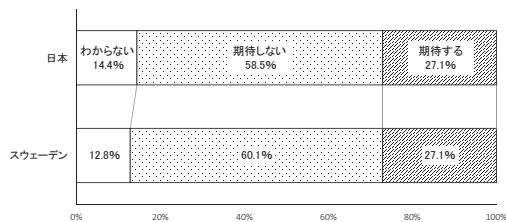


図14 日本とスウェーデンの子に老後の面倒を期待

2013年度に実施された内閣府による前掲の国際比較調査の同問の結果をみると、日本青年は「期待しない」が48.2%で、「期待する」31.5%を上回っている。「わからない」が20.3%であった。スウェーデン青年は逆の結果で「期待する」が49.3%あり、「期待しない」37.5%を上回っている。「わからない」は13.3%であった。青年のみに焦点を当てると、自分自身の老後については自分の子どもに面倒を期待する割合が多い傾向にあることがわかる (特にスウェーデン)。しかし、幅広い年代の本調査の結果では、老後の面倒を自分の子どもに期待しないという考えが多い結果になっていた。

#### ④ 子供に対する責任度の検討

最後に、世界価値観調査から導入した「親の子供に対する責任度」の設問では、回答に3つの選択肢が設定された。『親は子どもに最良のことを

してやるべきであって、それによって自分たちの幸せが子どもの犠牲になってもやむをえない。(Parents should do best for their children even at the sacrifice of their happiness.)』を「犠牲派」、『親には親の人生がある、親は子どものために自分たちの幸せを犠牲にすべきではない。(Parents have their own lives. They should not sacrifice their happiness for their children.)』を「自分の幸せ派」、『どちらでもない (No opinion.)』を「どちらでもない」の3群で分析した。

日本は「犠牲派」が38.9%、「自分の幸せ派」が30.1%、「どちらでもない」が30.9%とほぼ横並びである。スウェーデンは「犠牲派」が57.8%と過半数、「自分の幸せ派」27.8%、「どちらでもない」14.4%である。カイ二乗検定の結果 ( $x^2 = 30.445$ ,  $df=2$ ,  $P<.01$ )、有意差が認められた。残渣分析の結果、日本は犠牲派が有意に少なく、どちらでもないが多かった。また、スウェーデンは犠牲派が有意に多く、どちらでもないが少ないという結果であった (図15)。

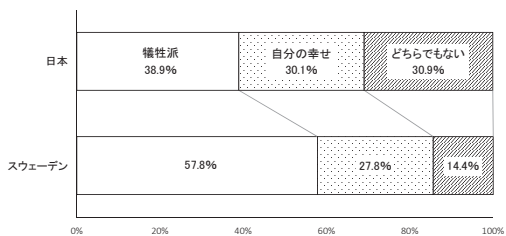


図15 日本とスウェーデンの親の子に対する責任度

日本の年代3群のカイ二乗検定の結果に有意差は認められなかった。スウェーデンの年代3群全ての年代において犠牲派が多く、カイ二乗検定の結果に有意差は認められなかった。参考にした第5回世界価値観調査 (2005年) から、子供に対する親の責任度は残念なことにスウェーデンは回答がなく、日本 (n=1096) のみの結果と比較する。「犠牲派」が43.6%、「自分の幸せ追求」21.8%、「どちらでもない」30.4%、「わからない」4.2%であった。本調査の年齢層が幅広いことの影響も推測でき、やや犠牲派が多く、自分の幸せ派が少ないが大きな相違はない。まとめると、親の子に対する

責任度については、子どもに最良のことをするのは当然であるが、親自身の幸せを追求する権利もあり、状況により意見が分かれるというのが現状である。

### 3. まとめと今後の課題

本研究では、スウェーデンと比較すると日本の老年期イメージがかなり暗いのであるが、老年期イメージの明暗について5段階評定での質問をしており、イメージの内容に関しては統一していない。思い浮かべるイメージは様々であり比較するには課題も多いと考えられるので、紙面の都合上、分析には含まれていないが、部分的にインタビュー調査の結果を補いながらまとめとしたい。

平成16年版高齢社会白書によると、「年齢・加齢に対する考え方に関する意識調査」で、高齢者のイメージについて否定的イメージは健康面と経済面の不安であり、肯定的イメージは経験や知識の豊富さ、自由な時間などが挙げられている。先行研究でも同じく身体的、精神的機能低下を否定的な高齢者イメージとして、人生経験や知識・技術の豊富さを肯定的イメージで捉えているものが多い。

老年期イメージが暗いということは、自分が年を取り高齢者になることへの否定的な感情があると推測される。しかも若年者ほど老年期イメージが暗いということは、日本の核家族化や身近な高齢者との接触機会等の減少が背景にあり、各自治体等で取り組んでいる世代間交流も十分効果的であるとは言い難い。昭和時代までは家制度の名残もあり、親族やコミュニティを中心とした年中行事や高齢者関係のお祝い行事なども盛んに行われ隣近所の密な交流もあったが、家族構成の小規模化やコミュニティ崩壊などの影響を受け、自然発生的な世代間交流は年々減少傾向にある。結果的に若年者にとって高齢者は遠い存在となってしまった。高い高齢化率を誇る日本社会でありながら、高齢者の存在を身近なものにしていく努力と工夫が益々必要であることを痛感する。日本のグループインタビューでは“老化（エイジング）に対して不安がある”という意見が大半で、“で

きたら年は取りたくないものだ”という発言が多かった。テレビや新聞、雑誌などのマスコミ報道でもアンチエイジングに関するものに興味関心が集中しており、若いというフレーズには人気がある。まずは、このような日本社会の老化に対するエイジズムを払拭することが必要であろう。また、高齢者が安心して暮らし、参加しやすい社会を実現するような行政、民間の高齢化対策についても課題は山積している。

それに対して、スウェーデングループのインタビューでは、“アンチエイジングの人もいるだろうが”と前置きして、“総じてエイジングを肯定的に自然に受け入れる傾向が強い”という意見が多かった。“退職すると、社会的責任から解放されて開放感があるし、経済的にもいい生活をしているので年金生活が待ち遠しいくらいだ”と言う。また、“制度も整備されているので安心して年を取れるから老後は明るい”という発言が複数あった。スウェーデンは1992年のエーデル改革により、保健医療と福祉を統合し「特別な住居」として認識することで、在宅主義を進めてきた。近年は民営化や家族介護支援によるサービス、制度の選択の幅も拡大しつつあり、社会保障制度の整備されたスウェーデンにおいても貧富の格差が広がり、「福祉国家」から「福祉社会」へと変化している（石橋2016、大塩2012）。移民政策を含む今後の動向に注目したい。

家族関係については年代の影響を受けており、若年者ほど家族関係の希薄な割合が高く、希薄なグループは対人信頼感が低いという結果であった。逆に家族の関係が深いグループはQOL、自尊感情、対人信頼感などが総じて高い。若年者は家族的には親のケアを受けている比率が高く、高年になるにつれ家族へのケアを提供する側に立つという立場や役割の相違が関係していると考えられる。

親子関係において、日本には老親の扶養義務はあるが緩和傾向で、同意識も年々緩くなりつつある。スウェーデンにはそもそも老親の扶養義務はなく、ケアは親から子供へと一方向であるという考えが強い。インタビューにも“自分は親と一緒に住みたいと思わないが、介護サポートではなく

社会的サポート（一緒に買い物に行く等）をするのは当然と考えている”、“親の社会的サポートをするのは義務という感覚はない”、“ケアは上から下（親→子）へ行くと考えている”、“あらゆるサポート [at all cost] の理解は、引き受けて一緒に住むということ。お金を費えるし、そうしている人もいる。サポートには、介護人では足りないこと（一緒に買い物）をやるということ”、“自分の夫の母の買い物はするが、掃除まではしない”、“スウェーデンでは夫の両親の面倒を見ることはないが、夫婦の片方が病気になったら100%面倒を見ている”という発言に反映されていた。つまり、法律的にも親が未成年の子を扶養する義務は強いが、成人の子が老親を扶養・介護する義務はない（大塩2012）。日本と違い社会保障が充実しているということも重要な要件である。

日本における老親扶養意識は、伝統的な義務感と責任感のもと、経済面、精神面、介護としての身体面の3側面に関わるものと考えられてきたが（太田・甲斐2002、杉山2010、堀内・齊藤2013）、時代と共に高齢者を取り巻く家族構造や家族形態により変化してきている。兄弟の出生順位や同居・別居の家族形態などの条件によっても異なるが、身体的な介護サポートが中心となっていることに変わりはない。介護保険制度に頼る面も多いが、まだスウェーデンのような割り切り方はできないのが現状である。今後、益々少子高齢化が進み、経済的にも貧富の格差が拡大し、家族関係・親子関係の変化も予測される中、安心して生活できる社会の実現を目指し、模索していきたい。

## 引用・参考文献

- ・秋山美栄子・大塚明子・森恭子・星野晴彦（2017）「ワーク・ライフ・バランスから見た日本とスウェーデンの比較調査研究」『文教大学人間科学部紀要第38号』, 93-107.
- ・大塚明子・秋山美栄子・森恭子・星野晴彦（2011）「価値観・労働観・ライフスタイル等に関する日本と北欧の比較調査研究 第1次報告」『文教大学人間科学部紀要第33号』, 105-119.
- ・大塚明子・森恭子・秋山美栄子・星野晴彦（2015）「自尊感情・対人信頼感・文化的自己観に関する日本とスウェーデンの比較調査研究—大学生・教員・福祉職員への聞き取り調査報告—」『文教大学生生活科学研究』第37集, 41-52.
- ・大塚明子・秋山美栄子・森恭子・星野晴彦（2011）『『集団主義の日本』と『個人主義のスウェーデン』の再検討—心理尺度を用いた比較調査を通じて—』『北ヨーロッパ研究』第8巻, 1-11.
- ・大塚明子・秋山美栄子・森恭子・星野晴彦（2012）「スウェーデン人および社会人と比較した日本人大学生の自己意識の特質について」『文教大学人間科学部紀要第34号』, 127-140.
- ・星野晴彦・大塚明子・秋山美栄子・森恭子（2012）「日本とスウェーデンの援助規範意識比較に関する研究—福祉政策に影響する両国の援助規範意識の特性に着目して—」『文教大学生生活科学研究』第34集, 27-36.
- ・森恭子・大塚明子・秋山美栄子・星野晴彦（2014）「移民への寛容意識に関する日本とスウェーデンの比較調査研究—大学生・教員・福祉職員への聞き取り調査報告—」『文教大学生生活科学研究』第36集, 151-165.
- ・星野晴彦・大塚明子・秋山美栄子・森恭子（2012）「日本とスウェーデンの援助規範意識比較に関する研究—福祉職員・教員・大学生の比較分析を通して—」『北ヨーロッパ学会』第10巻, 33-41.
- ・日本経済新聞（2017）『電子版（2017/9/15）』
- ・GLOBAL NOTE（2017）「世界の高齢化率（高齢者人口比率）国際比較統計・推移」GLOBAL NOTE ver.4.4.0
- ・石橋未来（2016）「スウェーデンの介護政策と高齢者住宅～岐路に立たされる高福祉国～」『大和総研調査季報2016年新春号Vol.21
- ・電通総研日本リサーチセンター編（2008）「世界主要国価値観データブック」『同友館』
- ・電通総研日本リサーチセンター編（2004）「世界60ヵ国価値観データブック」『同友館』
- ・内閣府（総務庁青少年対策本部）（2004）「第7回世界青年意識調査」『内閣府』
- ・内閣府（共生社会政策担当）（2009）「第8回世界青年意識調査」『内閣府』



- ・内閣府（2014）「平成25年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」『内閣府』
- ・内閣府（2015）「平成28年版高齢社会白書」『内閣府』
- ・内閣府（2016）「平成29年版高齢社会白書（概要版・PDF版）」『内閣府』
- ・内閣府（2004）「平成16年版高齢社会白書、第2章高齢社会対策の実施の状況」『内閣府』
- ・河野理恵・太田信夫（2003）「青年が抱く中年イメージと高齢者イメージ—日本とカナダのデータより—」『筑波大学心理学研究第26号』, 75-82.
- ・大塩まゆみ（2012）「スウェーデンの近親介護者サポート—再家族化・インフォーマライゼーションの波—」『龍谷大学社会学部紀要』第41号, 75-80.
- ・太田美緒・甲斐一郎（2002）「老親扶養義務感尺度の開発」『社会福祉学』42, 130-138.
- ・杉山佳奈子（2010）「成人子とその親子関係—子世代から見た老親扶養意識を中心に—」『老年社会科学』31, (4), 458-469.
- ・堀内愛子・齊藤勇（2013）「大学生の扶養意識—扶養意識における性差の存在及び自己愛的傾向との関連—」『立正大学心理学研究年報』第4号, 85-93.

---

#### [抄録]

世界第1位の高齢化率を誇る日本において、高齢者の年齢の変更が提案され、高齢者に対する様々な議論が展開されている。本研究では日本の現状について、共に長寿国であるスウェーデンと比較しながら、老年期イメージと家族観について考察した。日本は老年期に対する一般的イメージおよび個人的イメージ共に暗く、スウェーデンの結果とは真逆であった。また、年齢的な影響を受けており、若年<中年<高齢の順に老年期イメージが明るくなっていた。日本の福祉職は現実的なイメージをもっており、高齢者との接触機会が多く、個人差が大きいという高齢者像を理解できていることが示唆された。

家族観について家族関係の現状と親子関係に関する「子どもの経済的自立」「老親扶養意識」「自分自身の老後」「親の子供に対する責任度」を検討した。家族関係の深いグループはQOL、自尊感情、対人信頼感が高く、若い年代に家族の関係希薄が多く、関係希薄グループの対人信頼感が低いという日本の特徴が示された。親子関係では、①子どもの経済的自立について早く独立すべきという考えをもっている、②老親扶養意識について自分の生活力に応じて親を養う、③自分自身の老後の面倒は子どもに期待しない、④親の子に対する責任度についてはそれぞれ意見が分かれていた。

---